

「だから、わたしが愛し、慕っている兄弟たち、わたしの喜びであり、冠である愛する人たち、このように主によってしっかりと立ちなさい。2 わたしはエボディアに勧め、またシンティケに勧めます。主において同じ思いを抱きなさい。3 なお、真実の協力者よ、あなたにもお願いします。この二人の婦人を支えてあげてください。二人は、命の書に名を記されているクレメンスや他の協力者たちと力を合わせて、福音のためにわたしと共に戦ってくれたのです。」

(フィリピの信徒への手紙4章1-3節)

今日の聖書の言葉は、使徒パウロがフィリピ教会の人々に宛てた手紙の一節が記されています。パウロはここで、フィリピ教会の人々に対して、あるお願いといたしましょうか勧告といたしましょうか。あることをして欲しいと切実に願っています。そのあることというのは何かと言いますと、教会の中で起こっていた争いを終わらせて欲しいということでした。ここで直接名前を呼びかけられている2人の人物がいます。エボディアとシンティケという名前ですが、これはどちらも女性の名前です。この2人はどちらもこのフィリピ教会を建て上げるために、パウロと協力して中心的にその責任を担った人物であったものと考えられています。ですので、この2人の争いは個人的なことでは済まずに、教会全体を巻き込んで大きな影響を及ぼしていました。「あなたたち 2 人は、どうか同じ思いを抱いて下さい。お互いに主イエス・キリストによって立ってください。」そう呼びかけることで、パウロは何とか教会に一致と平和を回復しようとしているわけです。

この 2 人の女性がいったいどういったことで争うようになったのか、その理由は分かっていません。2 人とも教会の中心的な責任を担っていたわけですから、その自らの役割に対して大変大きな責任感を抱いていたことでしょう。そういう時は、とかく意見が他の人とぶつかりますと、責任感が強ければ強いほど簡単には相手に譲れなくなるのも無理はないのではないかと私は思います。とはいいいましても、その争いに巻き込まれる人たちは大変ですね。どっちに着くわけにも行かず、どっちにも気を遣わなければならないといった、大変緊張した状況が教会の中に出来てしまいます。また、近隣の人々からも決して好ましく見てはもらえませんか。「教会は、またケンカしているのか。神を信じていると言っているにもかかわらず、どうしてそんなに意見がぶつかってばかりいるのだ」と、眉をひそめる人もいると思われれます。

そういったご批判を受けるのはもっともなことです。ただそれは、私はある程度は仕方ないことだと思っています。それは何故かと言いますと、ここでパウロが主イエスによってしっかりと立ちなさいと言っていますね。実は、その主イエス・キリスト自身が、争いや分裂させることの必要性を、良くご理解されているからです。イエスさまは、このようにおっしゃったことがあります。「私がこの地上に来たのは、平和もたらすためだと思ふのか。そうではない。私が

来たのはむしろ分裂であり、あなたたちの間に剣をもたらすために来たのだ」(ルカ 12 章 51 節、マタイ 10 章 34 節)。そう言うのですね。これは大変意外で、「エッ？」と、ビックリするみ言葉だと思いませんか。てっきり、主イエスさまは、この地上に平和ももたらして争いを止めさせるために来たものと考えがちだと思います。イエスさまがどこで分裂を起こすのだと言っているかと言いますと、それはまず「家」であります(ルカ 12 章 52 節)。こういうことですね。もし、家の中が見せかけの平和で取り繕われていて、表面上いくら家族が仲が良いようにしていたとしても、その中身が問題だらけであったのならば分裂させた方が良いのだといのたということです。家族の誰かが我慢して無理して苦しんでいるよりも、たとえ一時の間争いが絶えない状況になってしまったとしても、本当の平和を家の中に築くために互いに向き合うことの方がずっと良いのですね。

そして、これは「祈りの家」としての教会も同じですね。相手を打ち負かすこと自体を目的としたり、自らがより優れているということを誇るために争いをくり返していたとしたら、それはもちろんダメですね。しかし、本当の意味で神の御心がなされる教会にするために、逃がれることなく相手にぶつかり向き合っゆくことをして行くのは、主イエスにしっかりと立っているしるしなのです。「信仰者とは、こうあるべきだ」と強く考えるのも、それも自分のことだけでなく、真摯にみんなの信仰のこと、教会全体の行く先のことに責任を感じているからです。主の祈りの家にまことの平和をもたらすために、「あの人はすぐに人を裁くから嫌いだ」といった汚名を被ることをいとわなかったその勇気ある役割は、これも神から出た愛の一つの形だと私は考えます。「自らの十字架を負って私に従いなさい」。そうイエスさまは、おっしゃいました。この争うことを恐れずに真の平和のために人々の批判に耐える苦しみも、この自ら負う十字架の中に 含まれているものと考えられるわけです。そういった意味で、このエボディアとシンティケの 2 人が互いに信じる所に従って争っていたとしたのなら、決して安易に誰も責めることは出来ないと思います。争うことを嫌い、そこに問題があっても見て見ぬふりをしてしまうことの方がずっと多い中で、嫌われ役を担って前に出ることの出来る人というのは本当に希少な存在です。

パウロは、確かにここで 2 人に対して争いをもう止めて欲しいと願っています。しかし、ここでは 2 人を頭ごなしに責めるようなことは、一言も言ってません。むしろ、あなたたち 2 人も、私の喜びであり私の冠である愛する人たちだと、最大の賛辞を送っています。これはこの 2 人が、主のために誠実に真剣に働いていることを、パウロが良く認めている証拠です。さらにこの 2 人も、「命の書」にその名が書き記されていることに触れることで、教会の人々に対して決して教会の中で争うことが、重大な罪となるわけではないことを伝えようとしています。

ただ、とは言いまでも、いつまでも争いが終わらないままでは、これもやはり教会はちりぢりに霧散して行ってしまいます。特に弱い人ほど耐えられずに、教会に来られなくなってしまうですね。パウロはここで、もう一つフィリピ教会の人々に対してお願いをしています。それは、3 節になりますが、「真実の協力者よ、この 2 人の婦人を支えてあげてください」というもの

です。つまりこれは仲裁する人を募っているわけです。いったん争いになり、互いに仲違いするようになると、とりつく島がなくなり和解する道筋が見えなくなるということが起こってしまいます。当事者同士だけではどうしても感情的になり、相手の言わんとするところを否定的にしか考えられなくなってしまうでしょう。皆さんも経験あると思いますが、間に入って仲裁するというのは本当に骨の折れることです。どちらからも不満をぶつけられたり、うまく両者のバランスを保てなくなって恨まれてしまったり、本当に難しい役割です。私も経験がありますが、間に入って何とか間を取り持とうとしてくれる人を、疎ましく思って「もう、ほっといてくれ！」と、その人に怒りをぶつけてしまうということもしてしまいました。何とも割に合わない、自分に何の益ももたらさないのが仲裁者の役割です。ただ、これも主イエスキリストがこの地上で担われた和解の勤めに連なる大切な信仰者の進む道でありますね。「自分の十字架を背負って、私について来なさい」というみ言葉の中ですが、この和解の勤めに伴う苦しみも、十字架の見苦しみの中に入っているのです。

仲介者が自分が安全なところにいたのなら、決して相手は心を開いてはくれません。自らの守りを捨て、相手の懐に飛び込んで行くことで初めて、固く閉ざしたその人の心、揺さぶることが出来ますね。パウロはここで、フィリピ教会の人々に対して「どうか、その和解の働きに進んで欲しい、2人にとって真実の協力者となって欲しい」そうお願いしているわけです。それは、主イエスキリストの十字架の苦しみが、そのまま終わることにはなかったこと。その痛みが復活の喜びへと変わったように、必ずあなたたちが担う痛みや苦労は喜びへと変わるのだからということに、パウロは信頼していたからです。この真実の協力者となることも、パウロにとっての喜びであり、彼の冠となる愛する人たちなのです。そして、それは同時に主イエスキリストご自身の喜びであり、冠である愛する人たちなのであります。

このことを、今日の聖書の言葉から共に聞きたいと願います。